

マイケル・スペンサー氏からのヒアリング概要 ～「ファシリテーター」の活動紹介～

ヒアリング日時等：平成 25 年 2 月 4 日（月）9 時 30 分～11 時 30 分、上野学園大学

○ マイケル・スペンサー氏の活動

- ・ ロンドン交響楽団に在籍し、他の団員とともに音楽を通じた教育活動に従事してきた。
- ・ 1998 年に札幌市のパシフィック・ミュージック・フェスティバルに、ロンドン交響楽団が招待され、その後、英国で実践されている音楽ワークショップの教育活動を紹介してきた。
- ・ また、2001 年からは、日本オケストラ連盟からの招聘もあり、日本でロンドン交響楽団の教育活動を紹介した。その後、毎年、同連盟から招聘を受けて、活動を続けてきた。
- ・ 2009 年以降は、上野学園大学音楽文化研究センターが同氏を招聘し、そこを拠点に活動を続けている。

【参考】活動事例

- ・ 来日の際は、上野学園大学、静岡県コンベンションアーツセンター、ミュゼ川崎シンフォニーホール、日本フィルハーモニー交響楽団で、学校の音楽教諭、実演家、大学の教員、民間教育事業者等が参加したうえでワークショップやファシリテーター養成講座を実施している。

【ワークショップの例】

- ・ 新聞で見た文字、図形、情景等を各自が持つ楽器を用いて、音楽で自由に表現して合奏する。お互い感じ合ったことを意見交換する。（日本）
- ・ 歌舞伎について学んだロンドンの子どもがシェークスピアの劇を歌舞伎風に台本や曲を作り演じる。（イギリス）
- ・ 子どもたちが関心のあるテーマ（教育問題、家庭内暴力等）に関して、子どもが中心となって、台本や音楽等を議論し合って簡単な音楽劇を製作する。（南アフリカ）

- ・ 昨年、日本で実施したワークショップには、ファシリテーター等のワークショップ実践者が 282 名参加した。日本国内で関心のある者がどれくらいいるかについては不明だが、参加者の多くから、ファシリテーター養成の必要性が指摘された。

○ファシリテーターの定義等

- ・ 「ファシリテーター」の語源は、フランス語の facile（容易である）である。ファシリテーターは、ワークショップ受講者が理解していること、考えていること、感じていることを各自がより分かり易く整理・理解できるよう、個々人の意見表明や他者とのコミュニケーションを促す。
- ・ 英国では、大学院修士課程（1年間）において、約 4～5 年前からファシリテーターを養成するコースが設けられるようになってきている。
- ・ 英国におけるファシリテーターの数は統計がないため不明だが、楽壇の音楽家等の間に広く浸透しており、数は多い。

- ・ 英国では、アーツカウンシルから助成を受けるための条件として、「社会貢献活動を行う義務」が課される。このため、ソフト事業でもハード事業でも、事業費の一部で、ファシリテーターが関わって文化芸術の力による教育活動を行うことが一般的である。

○ ファシリテーターの活動成果等

- ・ ファシリテーターに必要な視点としては、教育学者の知見に基づきながら、①参加者の選択 (choice) の方法の促進、②好奇心 (curious) を持たせること、③人や対象物との関わり (関係性 (relationship)) を促すこと、である。また、「実践」→「評価」→「反省」→「失敗等を改善する方策の仮説」→「再考」→「再実践」というサイクルで科学的に実施している。
- ・ 普通の学校の授業では意見を言わないような子どもも、人前で考え方を表現できるようになり、それが授業においても活かされている。(【参考資料】を参照)
- ・ 演奏能力や鑑賞能力の向上ではなく、子どもの生きる力や発言力の向上を目指している。
- ・ 英国では、社会人や地域の人々を対象としたワークショップも行われており、人口減少社会において、劇場等がコミュニティ形成の核としての機能も果たしている。

【参考資料】英国が実施した「クリエイティブ・パートナーシップ事業」(以下「CP」という。)(注)を受けた子どもの学習成果

(注) CP は、2002 年～2011 年に実施された芸術文化を活用したワークショップ等のパイロット事業。この 10 年間の間に約 5000 校 (教員 150,000 名、児童生徒 1,000,000 名) を対象に実施された。

○英国教育水準局 (Ofsted; Office of Standard Education) による調査 (6 地域 36 校)

- ・ CP に参加した青少年の基礎学習力がめざましく向上した
- ・ 読み書き、とりわけ作文と会話能力の向上は極めて大きかった
- ・ 青少年の自信と明確な自己主張に明らかな進歩があった
- ・ 即興の能力、失敗を恐れない能力、回復力、他人とのコラボレーション能力などクリエイティブな技術が向上した

○BMRP 研究所による 510 人の校長を対象にした調査 (括弧内はそう感じた校長の割合)

- ・ 生徒の自信が向上した (92%)
- ・ 生徒のコミュニケーション能力が向上した (91%)
- ・ 生徒の学習意欲が向上した (87%)
- ・ 生徒が学校で楽しく学ぶことが増えた (全体で 76%、中学校では 80%)
- ・ 生徒の自習能力が向上した (全体で 76%、中学校では 78%)
- ・ 生徒の学ぶ態度が改善した (全体で 57%、中学校では 70%)
- ・ CP は教育水準の向上に極めて大きな貢献をしたと思う (79%)
- ・ CP は学校における技能を向上させたと思う (79%)
- ・ CP に参加することで、単なる試験結果よりも生徒の成長がより明確になったと思う (78%)

※ 上記の調査結果は、Creative Partnership approach and impact, Arts Council England (2006 年) から、吉本光宏氏 (ニッセイ基礎研究所) が抜粋・要約したもの